

語分類における Particle の処理 について

瀧 野 徳 三 郎

英語における語分類 (word-classification) の問題は、常に文法の基本的課題の一つである。Jespersen は、屈折形態素 (inflectional morpheme) や派生形態素 (derivational morpheme) などの形態的特徴を示さない語即ち不変化詞として、adverb の一部、preposition, conjunction, interjection を統括した particle の設定を提唱したが、これが語分類上の位置に関しては幾らかの問題を提供している。以下の小論は、近代英語における顕著な特徴の一つであり、且つ屢々 structural ambiguity を示すところの、例えば turn on the light, look after his father, pass by the road などの例によって公式化される verb+particle+nominal 構文を中心として、particle の語分類上の処理に関する考察を試みるものである。

まず verb+particle+nominal 構文の枠内に入る particle は、伝統文法における adverb の一部と preposition だけであって、一般学校文法においては、この両者の区別は particle の後に nominal を伴うか否かに依っている場合が多い。

He climbs *up*. (adv.)

He climbs *up* the tree. (prep.)

They are walking *along*. (adv.)

They are walking *along* the street. (prep.)

確かに preposition はその本来の語義からすれば、nominal の前に置かれる詞であるし、その機能もその様な position において最も多く見出され

るのであるから、particle の後に nominal を伴う場合は preposition, nominal を伴わない場合は、(nominal が内包されていると考えられないこともないが) verb の支配を受ける adverb であると判断して不思議でないかも知れない。しかし、これはあくまで一面的皮相的な判断であって、nominal を伴う場合でも particle が adverb であることは屢々見受けられる通りである。

He looked *up* the word in the dictionary.

They put *down* the riot.

従って問題はここから発生する。即ち、純形態主義的観点から、同一形態の語が語の分類と云う level で、時に preposition、時に adverb と呼称を異にすることは十分異論のあることであろう。

ここで Jespersen の particle 設定の動機を探ってみる必要がある。彼は次の様に考察する。He sings. He plays. における sings, plays と、He sings a song. He plays the piano. における sings, plays とは、その後に補足語（この場合は目的語）を伴うか否かによって、前者を自動詞、後者を他動詞と sub-classification がなされるが、一律に verb と云う category の中に包括してしまっているに対し、既述の例の *up*, *along* は後続 nominal の有無如何によって preposition と adverb ともなり、明らかに語類別が行われており、これは合理的でない。従って preposition にも adverb にもなりうる語は、むしろ一つの class として統括し、丁度完全動詞、不完全動詞がある様に、それだけで完全であることもあれば、補足語を伴って完全になることもあると考えた方が妥当である。この主張は決して無理のないところで、次の様な例、

It was *near* one o'clock.

It is somewhere *near* here.

The sun is *near* setting.

では、第一 *near* が preposition か adverb かその判別には困難を感じる

し、又、

It is *near* the end of the year.

It is *about* a mile.

の様な例では、*near* と *about* が同一機能を示していると考えられるにも拘らず、概して多くの辞書が *near* は preposition, *about* は adverb と範疇別を行っているのも当を得ない。従ってこうした類例においては、その判別の困難さから、矢鱈と不必要な論議が繰返されることになる。

又 conjunction に関しても別個の class を設ける必要はないと主張する。

after his arrival (prep.)

after he had arrived (conj.)

He laughed *for* joy. (prep.)

He laughed *for* he was glad. (conj.)

これらの例に見られる様に、preposition と conjunction の相異は、その補足語と考えられるものが、noun であるか sentence (又は clause) であるかであり、conjunction は sentence-preposition であると解釈できる。

かくて Jespersen は、結論的に次の様な parallelism を与えて、particle 設定の動機を説明する。

(1) I *believe* in God. They have lived happily ever *since*.

(2) I *believe* your words. They have lived happily *since* their marriage.

(3) I *believe* (that) you are right. They have lived happily *since* they were married.

この parallelism から、(1)(2)(3)の *believe* を verb と云う一つの class として認めている限りにおいて、同一理由から各々の *since* を particle と云う一つの class に包括する必要のあることを知るわけである。即ち、substantive (= noun), adjective, pronoun, verb 各 class 相互間ほどの差異

が、上述の如く adverb と preposition と conjunction の間には存しないと主張する。

In nearly all grammars adverbs, prepositions, conjunctions, and interjections are treated as four distinct “parts of speech,” the difference between them being thus put on a par with that between substantives, adjectives, pronouns, and verbs. But in this way the dissimilarities between these words are grossly exaggerated, and their evident similarities correspondingly obscured, and I therefore propose to revert to the old terminology by which these four classes are treated as one called “³⁾particles.”

語分類の基準を主として形態に置く Jespersen にとって、particle の提唱は当然と考えられるが、そこに些か疑問が見出されないわけではない。それは形態を重視し乍らも、*slow and stately* や *He stayed long.* における *slow* や *long* を adjective の adverbial use であると解すべきでなく、形態が同一でも、このような context では adverb と考えるべきであるとする。この態度は particle の設定に際し、同一語を異なる class に分類することを避けようとした態度と相容れないことを知るであろう。従って、次に形態に対する彼の根本的理念が何であり、範疇決定の基準を何処に求めているかを問うて見る必要がある。

...we should recognize in the syntax of any language only such categories as have found in that language formal expression, but it will be remembered that “form” is taken in a very wide sense, including form-words and word-position.⁴⁾

...it is wrong to treat each separate linguistic item on its own merits; we should rather look at the language as a whole.⁵⁾

この二つの引用文から、一言語を全体として眺めての、極めて広い意味での形態主義を執るべきだとする彼の態度が汲みとれる。即ち彼の「形態」

は、単に語形だけでなく、語の分布 (distribution) をも含むもので、その意味で多分に機能的要素をもつものであることが分るのである。

しかし乍ら、一方従来の *adverb, preposition, conjunction* は明らかに機能的分類であるが、これを統合して一つの上位概念の範疇にまとめようとすることは、或る程度機能的基準による分類に目をつぶろうとすることである。このことは形態論的処理の施された、即ち屈折・派生形態素をもたない語を統括した *particle* ではあるが、彼の云う処の「極めて広い意味での形態」を十分に考慮し分析した上での *class* 設定であったかどうか、そして最早それは機能的段階での *sub-classification* を必要としないのであろうか、と云う疑問を残す。しかし、こうした点に関する曖昧さが、事実、彼の語類別の規定の中に見出されるのである。

- (1) *Substantives (including proper names).*
- (2) *Adjectives.*
- (3) *Pronouns (including numerals and pronominal adverbs).*
- (4) *Verbs (with doubts as to the inclusions of "Verbids").*
- (5) *Particles (comprising what are generally called adverbs, prepositions, conjunctions—coordinating and subordinating—and interjections). This fifth class may be negatively characterized as made up of all those words that cannot find any place in any of the first four classes.*

この語分類の表示において、*particle* はその否定的特徴として最初の四つの *class* のいずれにも入らない語すべてから成る、と彼は述べているが、積極的に *particle* と云う *class* の規定がなされないと云うことは、取りも直さず、*particle* が屈折・派生の形態素を示さない語であると云う以上に明示的な特徴を有たないと云うことであろう。そしてこの「不変化」と云う特徴は、少くとも英語においては、重要な構造的特徴ではあり得ないのであるから、*particle* と云う *class* を設定しても、それが形態論の範疇

から出て統語論的処理を行わなければならないと云う事が起り得るのではないかと思われる。「広い意味での形態」即ち *sentence* における機能の特徴をも考慮した上での *particle* の提唱ではあるが、「不変化」と云う特徴が、文法的特徴として否定的にしか律し得なかったと云う点に矛盾が感じられるのであって、事実、Jespersen 自身も *particle* の設定を試み乍ら、*adverb*, *preposition*, *conjunction* の用語の使用を余儀なくさせられている。従って結果的には、「使わざるを得ない用語はできるだけ確明瞭に規定して使えばよいのであって、これに反対して、別の分類を立てても無益だろう……」と云うようなことになるう。

しかし乍ら、*particle* の規定の曖昧さもさること乍ら、我々が *particle* と云う用語を時に便宜に使用しうることを認めるであろう。そこで、この「不変化」と云うそれ自体は文法的特徴とは云えない特徴をもつものを、なおそれでも一つの *class* として設定し、Jespersen の矛盾をも包含し得るような捉え方が出来ないものかと云うことについて、語分類全般の問題との関連において考察を進めていきたい。

Jespersen の *particle* は、その設定の動機が「不変化語」を統括したにすぎないと云う、消極的なものであったことは認めなければならないが、ここで語分類の基準を何に求めるべきかについての基本的な問題に触れておく必要がある。

所謂伝統文法は、語の分類に関して一、二の多寡はあるが、概して八品詞を唱えて来た。これらは屢々意味基準の記述であり乍ら、形態的・機能的基準の記述も混淆し、その結果 *overlappings* や *gaps* を随所にもたらす不合理性を露呈したことは周知の通りである。尤も非科学性が非難される多岐にわたる取扱い方を招来したものが、英語に内在する本質的な *complexity* に基因しているとも想像される。従って明確な一つの分類の *principle* を立てて、それに基づいた *logical* な方法による理想的な *defin-*

ition を以て、完全記述できるとは考えられないかも知れない。この点に関して、Bloomfield も、

...a system of parts of speech in a language like English cannot be set up in any fully satisfactory way...⁸⁾

と述べているが、しかもなお満足すべき記述を目標にするならば、幾つかの手法の併用が考えられるであろう。勿論、併用には伝統文法に見られる level の混用があってはならないし、基準の乱用があってはならない。言語の構造を適確に而も矛盾なく分析把握できるような手法、そしてそのための基準の採用でなければならないことは勿論である。

ところで何を基準におくかに関しては、従来一般に意味か形態か機能かにその焦点が向けられているが、意味基準の曖昧さは既に伝統文法において明らかであって、H. A. Gleason によれば the least promising type of definition⁹⁾ である。意味基準の排除は形態か機能かにその準拠を求めなければならない。この両者の問題は既に多くの文法学者の宿命的な課題の一つであって、就中、Jespersen が機能主義者 W. F. Leopold との論争¹⁰⁾において述べた主張は、この場合注目すべきものであろう。

Should form or function be the prime object of the grammarian? My answer is...that the grammarian should neglect neither side, for both form and function are necessary to give a full picture of the grammatical structure of any language.¹¹⁾ と述べて、彼自身、a full-blooded formalist¹²⁾ にみられたことに対し強く反駁している。形態と機能の問題は、いずれを採るべきかでなく、この両者の関係が言語の生命の最も中心的な課題に触れると云う考えに立つべきである。そしてこれら形態的機能的特徴をこそ、文法的或は構造的特徴と呼ぶべきであって、これを並列的に記述することによってのみ、単独の場合に生じる多くの矛盾曖昧さが相補されるのである。

さて、形態と機能、この両基準を併用し而も level の混同を惹き起さな

いもの、と云う立て前から、Gleason, Fries, Sledd の方法は十分に考慮の対象となるものである。Gleason は inflection と use in sentences, Fries は class words と function words, 又 Sledd は ending と position, と云う様に用語こそ異なるが、いずれも形態論と統語論の両 level の区別立てを守ろうとしている。勿論、夫々に細部の点で欠点がないわけではないが、英語の複雑な言語事実からして、その文法を単純且つ合理的な手法で記述することが如何に困難な作業であるかを考えるとき、伝統文法の level の甘さを一応除去していると言う意味においても一步前進した手法であろう。Gleason も述べているように、語の分類に関して定義を下すことは確かに ‘presumptuous’¹³⁾ なことかも知れない。今日では「名詞とは……」「形容詞とは……」と概念的定義を下すことに文法家たちは極めて懐疑的であり、その方法は definition ではなくて characterization である。

...But word classes certainly can be characterized. That is, features can be listed by which, taken singly or in combination, most words can be assigned to an appropriate part of speech.¹⁴⁾

...The characterization is informal, but effective. Native speakers of English can easily judge, in most cases, since they sense correctly what is common to any reasonably homogeneous list, whether they can specify what they feel or not.¹⁵⁾

Gleason が云うところの any reasonably homogeneous list を、実際に理想的な形で作成することは困難であろう。しかし、彼等の方法がこの方向に正しく向っていることは認められる。即ち、文法は a system of word classes characterized by maximum homogeneity within the classes¹⁶⁾ を目標としなければならないと云えるであろう。

英語の構造が完全に外面的特徴で捉えられるという構造主義者たちの中でも、取分け厳しい見解と手法を語分類に示している一人は Sledd であるが、その分類法を表示すれば次の様になる。

I. Ending による分類

1. nouns
2. verbs
3. pronouns
4. adjectives
5. adverbs

II. Position による分類

a. main classes

1. nominals
2. verbals
3. adjectivals
4. adverbials

b. smaller classes

1. determiners
2. prepositions
3. conjunctions
4. relatives
5. interrogatives
6. intensive-reflexives
7. auxiliaries
8. adverbials of degree¹⁰⁾

level の混同を避けることが、科学的態度として第一条件であることは云うまでもない。その意味では Sledd の方法はまことに峻厳である。しかし、若し彼の方法に欠陥があるとすれば、それは余りにも峻厳でありすぎることはなかろうか。峻厳であるがために、かえって英語の一般的記述が無視されてはいはしまいか。

例えば *young, younger, youngest* のように比較変化を示すものを *adjective* として分類するが、それ以外の、伝統文法で当然この class に含めて来た *beautiful* などは、同様の変化を示さないと云う理由で *adjective* とは看做されない。この ending の枠からはみ出した語は、第二段階の *positional classes* で掬い上げ、*beautiful* は機能的名称の *adjectival* の category に入れられる。この方法は合理性を唱える Sledd として当然の帰結であろうが、合理的であるが故に *young* と *beautiful* 両語のもつ（或る意味では ending と云う基準で区別されるより以上に重要ではないかと思われる）一般的性質、例えば伝統文法で示される、*the+adjective = noun* という記述がされないで終わってしまう。これは ending と云う一つの基準にこだわりすぎた結果であろう。

そこでこの様な欠陥を多少とも是正する一つの方法として、例えば、*beautiful* の比較変化に冠せられる *more, most* も *-er, -est* と同価値をも

つ広義の morpheme と考えられはしないかと云うことである。Sledd の方法は、形態論的分類と統語論的分類とを余りにも対立的に考えすぎている。事実、inflection をほとんど消失し、綜合言語 (synthetic language) から略々分析言語 (analytic language) に変貌した英語を、rigid な形態区分で一貫分類することには限界があり、合理的とは云え、合目的記述に反する結果となろう。従って、形態と機能と云う二つの基準の併用は、結論的には、「形態」の意味を Jespersen の主張する「広い意味での形態」と考え、極端な level の混同の起らない限りにおいて、必要に応じて統語論的基準を加味した形態論的分類を行い、第二段階において科学的分析の上に立った機能的分類に望むのが、Sledd の峻厳さは多少失われるにしても、より合目的な手法と考えられる。

分類の一般的基準と方法に関する方向付けを、上述の様に試みた場合、particle はどのように考えられるべきであろうか。Jespersen の particle は、云わば屈折・派生形態素のない不変化語をただ一まとめにした消極的な方法ではあるが、全く語の position を無視したわけでないことは既に述べた通りであるし、一語一類主義を原則的に守ろうとする限りにおいて、その共通性を指摘し、adverb, preposition, conjunction の統括を試みたことは十分に認められるべきであろう。そこで、既に示した Sledd の方法、即ち preposition と conjunction とを統語論の領域においてのみ取扱ひ、他の屈折語尾をもつ noun や verb などと level を異にする分類法に、Jespersen の particle 論の主旨を加味した折衷的な方法を示したいと思う。

I. (広い意味での) Form による分類

1. nouns 2. pronouns 3. verbs 4. adjectives 5. adverbs
6. particles 7. conjunctions 8. interjections

これは広い意味での形態論的分類である。屈折・派生形態素をもたない

adverb の一部, preposition, conjunction, interjection は統語論の段階においてしか記述出来ないとする Sledd の方法よりは, 不変化は不変化と云う一つの特徴と, 不変化語特有に与えられる位置と云う特徴とを合せ考え, adverb の一部と preposition とは一つの particle と云う class に統合し, conjunction, interjection は夫々に独立させて, 先ず形態論の段階で他の語類と同列に並べた方が, 有用性と云う面からしてもより workable であろう. preposition と adverb の一部を統合して一つの class を設定する理由は, この両者が, verb+particle+nominal 構文にも見られる通り, 屢々同位置を占めるために生じる機能的類似性とその判別の困難さがあるからである。¹⁸⁾

このように広い意味での形態論的分類において, いずれかの class に枠付けされたのち, 統語論の段階でその機能を対象とした分析がなされる. この段階においては, Sledd の position による分類の main classes を以下のように改める.

II. Function による分類

1. nominals
2. verbals
3. adjectivals
4. adverbials
5. prepositionals
- (6. conjunctions)
- (7. interjections)

形態論での particle は統語論の段階で, adverbial, prepositional, adjectival のいずれかに sub-classify されるが, これについては後述する.

以上の分類方法は, 極めて大綱的であって, 細部に互っては問題も起るであろうし, Sledd, Gleason の方法に比べて, 形態論の段階では一見伝統文法への逆戻りの感がしないでもないが, 組織的な基準をもたない伝統文法と異なり, 形態と機能の両 level を踏まえ乍ら, 合目性をも考えようとしたものである.

以上において, adverb の一部と preposition とを統括した particle を, 一つの class として形態論的に規定しようと試みたのであるが, sub-clas-

sification の段階において、最初に提示した verb+particle+nominal 構文における particle の機能的特徴について述べておこう。この構文における particle が adverbial か prepositional か adjectival かは、他の要素との結合の仕方、位置、音調等によってその特徴を知ることができるが、屢々その差は微妙である。

因みに F. R. Palmer は verb+particle の結合に関して、次例に見られる下線の部分の phrase を、文法上 single unit¹⁹ として取扱う。

He looked after his aged father.

She made up the story.

その理由の根拠として次の三つを挙げている。

- 1) severe collocational restriction がある。look after someone, make up a story とは云えても、look before someone, make down a story とは云えない。
- 2) semantic units を成している。look after=tend, make up=invent
- 3) passives に変えることが出来る。

His aged father was looked after.

The story was made up.

しかし、これらは semantic な意味での units を形成していると云えても、*after*, *up* 夫々の particle のもつ下位区分における機能的特徴の説明にはならない。

又、Fries は

The grammar of a language consists of the devices that signal structural meanings.²⁰

と述べているが、その示差的特徴を語の position に主眼をおくため、particle に関しては一律に function words として Group F の中に分類しているだけで、sub-classification に関する言及はなく、次の様に characterize しているにすぎない。

The words of Group F are followed by Class 1 words but may be preceded by words of Class 1, Class 2, or Class 3.²⁰⁾

そこで sub-classification の判別の一つの方法として、transposition と substitution²¹⁾ による一例を挙げてみる。

(Adverbial)	(Prepositional)
She+made+up+the+story.	He+looked+after+his+father.
×	He+looked+after+him.
She+made+the+story+up.	×
She+made+it+up.	×
×	His+father+after+whom+he+ looked+was+good.

上例においてブランクの部分はそれに対応する文がないことを示すのであるが、この様に *up* と *after* の現れる位置は必ずしも同じでない。即ち、prepositional の場合は常に nominal の前に位置していることが分る。しかし、この test frame だけでは十分な判別が出来ないことがある。例えば、

He shot *at* the bear.

He walked *up* the hill.

における *at*, *up* は先述の test frame によればいずれも prepositional と判断できるが、これに passive-transformation を加えるとき、前者は

The bear was shot *at*.

と云い得るが、後者は

*The hill was walked *up*.

となり、ungrammatical²²⁾ である。このことは、*at* の *shot* との結合の度合が *up* よりも密接な syntactical relation をもつことを示すもので、従ってこの場合、*at* はより adverbial であるといえるであろう。尤も両者の差は極めて微妙であることは云うまでもない。

しかし、positional frame が testing のために常に役立つとは限らない。それは phrase 即ち verb+particle が屢々二つ以上の意味をもつ場合があるからである。例えば、pass by (そばを通る：見落す)、stand by (そばに立つ：援助する)、look over (～越しに見る：調べる) などの場合は、position による testing だけでは曖昧を免れない。

John tried to pass by the road.

They looked over the bank.

これらの例で、by と over が adverbial であるか prepositional であるか判別に困難を感じるが、少なくとも written language においては決定的な手掛りは見付からない。A. A. Hill はこの両者を区別する示差的特徴として、stress の variation (primary /^ˆ/, secondary /^ˈ/, tertiary /^ˌ/, weak / /) を指摘している。²⁴⁾

1. /John tried to pass by the road #/
² /^ˆJohn ^ˆtried to ^ˆpass ^ˆby the road ^{3,1} #/
2. /John tried to pass by | the road #/
² /^ˆJohn ^ˆtried to ^ˆpass ^{3,2} by | the road ² ^{3,1} #/
3. /John tried to pass by the road #/
² /^ˆJohn ^ˆtried to ^ˆpass ^ˆby the road ^{3,1} #/
4. /John tried to pass | by the road #/
² /^ˆJohn ^ˆtried to ^ˆpass ^{3,2} | by the road ² ^{3,1} ²⁵⁾ #/

即ち、by の stress が primary か secondary の場合は adverbial であり、weak か tertiary の場合は prepositional である。そしてこの特徴は、by が文尾に来た場合にも適応できる。

This is the road | John passed by.

This is the road | John ^ˆpassed ^ˆby.

position と stress と云う示差的特徴によって、particle を adverbial, prepositional の二つの sub-class に分ける手掛りを知ることが出来たが、この様な機能的特徴の判別が、test frame の設定の方法如何によって異った分類を示すことがある。

He turned on the light.

における *on* は positional test によって,

He turned the light *on*.

と transposition が可能であり, 従って *on* は adverbial であることが認められる. しかし, 次の二文,

He stroke the door *open*.

He turned the light *on*.

において, *open* と *on* とはその文法的機能に何等相異を見出すことは出来ない. それはこれらの文の背後には, 当然

The door was *open*.

The light was *on*.

と云う base が考えられるからであって, もし nominal+verb+adjectival の frame に適合すれば, *open* と同様 *on* もまた adjectival と認めるべきではないかと云うことになる. 即ち, transposition によって nominal の直後に位置し得る adverbial particle は, adjectival の性格をもつ場合があることを知るわけである.

このことは, sub-classification を進めていく場合, 機能的判別が一面的であってはならないこと, 厳密な分析が必要であることを示すと同時に, frame 設定の困難さを表わすものである.

以上において, particle の語分類における処理並びに sub-classification に関する考察を試みた. adverb の一部と preposition と conjunction とが共通の同一形態をもち, 且つその機能的類似性から一つの class に統括しようとした Jespersen の方法は, 幾らかの矛盾もあり, 彼自身も認めている様に, negative な設定であるだけに, 未整理の感がないわけではない. しかし基本的な態度として, 範疇決定に屢々基準の曖昧さを露呈するような区分の方法は極力避けねばならなし, もし統括されることによってその曖昧さが避けられるならば, 上位概念の範疇の設定はむしろ望まし

く、又その方が合目性に適うのではなかろうか。その意味で、particle の広い意味での形態論の設定は必要であって、この段階において他の class words と同一 level に並列した上での記述を行い、sub-classification に関しては機能的段階で処理することにすればよい。語分類が、本来、文法を出来るだけ簡便に記述するための手段であるならば、科学性と同時に合目性も忘れてはならないであろう。

注

- 1) Cf. Otto Jespersen, *The Philosophy of Grammar* (London: George Allen & Unwin Ltd., 1948), p. 87. Jespersen が初めて particle と云う用語を使用したわけではない。近代科学文法においては、既に Sweet が語を二大分類し、declinable (変化詞) に対する indeclinable (不変化詞) の別称として使用している。Cf. H. Sweet, *A New English Grammar* (Oxford: The Clarendon Press, 1952), p. 37.
- 2) O. Jespersen, *op. cit.*, p. 89.
- 3) *Ibid.*, p. 87.
- 4) *Ibid.*, p. 50.
- 5) *Ibid.*, p. 51.
- 6) *Ibid.*, p. 91.
- 7) 桃沢力「*Philosophy of Grammar* の解説」『不死鳥英文法ライブラリー-10』(東京: 南雲堂, 1964), p. 58.
- 8) Leonard Bloomfield, *Language* (London: George Allen & Unwin Ltd., 1965), p. 269.
- 9) H. A. Gleason, Jr., *Linguistics and English Grammar* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1965), p. 116.
Certainly the least promising type of definition is that based on meaning. In the first place, it is hard to draw the lines clearly and decisively. We do not at present have sufficiently precise techniques for delimiting and classifying the meanings of words.
- 10) Cf. W. F. Leopold, "Form or Function as the Basis of Grammar?" *The Journal of English and Germanic Philology* vol. 34, (1935), pp. 414-431.

... The purely formal approach leads to particularly incomplete results in an "amorphous" language like English....In my conviction, neither

form nor meaning are the primary domains of grammar, but syntactical function. (*Ibid.*, p. 431)

- 11) Otto Jespersen, "Form and / or Function in Grammar" *The Journal of English and Germanic Philology* vol. 35, (1936), p. 461.
- 12) *Ibid.*, p. 461.
- 13) H. A. Gleason, *op. cit.*, p. 119.
It may, indeed, be presumptuous to assume that definitions can be written at all.
- 14) *Ibid.*, p. 119.
- 15) *Ibid.*, p. 119.
- 16) *Ibid.*, p. 130.
- 17) Cf. James Sledd, *A Short Introduction to English Grammar* (Chicago: Scott, Foresman and Company, 1959), p. 110.
- 18) 派生的, 複合的なものを除いて, 一般に単純前置詞 (simple preposition) と呼ばれるもののうち, その多くが同時に副詞的機能具备, 接続詞的機能を示すものは, after, before, but, for, since, till などその数は限られる。又, interjection に関しては, 抑々 particle の中に包括しようとする Jespersen の理由は極めて薄弱である。Cf. Jespersen, *op. cit.* p. 90.
- 19) Cf. F. R. Palmer, *A Linguistic Study of the English Verb* (London: Longmans, Green and Co. Ltd., 1965), p. 180.
- 20) Charles Carpenter Fries, *The Structure of English* (New York: Harcourt, Brace and Company, Inc., 1952), p. 56.
- 21) *Ibid.*, p. 96.
- 22) Cf. W. Nelson Francis, *The Structure of American English* (New York: The Ronald Press Company, 1958), pp. 266-267.
- 23) Cf. Paul Roberts, *Understanding Grammar* (New York: Harper & Row, Publishers, Inc, 1954), pp. 227-228.
- 24) Cf. Archibald A. Hill, *Introduction to Linguistic Structures* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1958), pp. 244-246.
- 25) 語の上の数字は pitch levels (1, 2, 3, 4低↔高) を表わす。